2021 年度 森泰吉郎記念研究振興基金 研究者育成費（博士）
研究成果報告書

研究課題名：建築ストック活用の大衆化を目指した支援の研究
所属・学年：政策・メディア研究科後期博士課程 1 年
著者名：田中惇敏（atsu.t@keio.jp）

アブストラクト
本研究は、建築ストック活用の各段階を一体となった創造行為として理解し、全国の様々な実践からそれぞれ段階とその関係の間の良質な型の抽出を試みた。

キーワード
建築ストック活用/ゲストハウスのレジリエンス/こそだてのしやすさ/サウナ創造実践/パターン・ランゲージ

1. (申請時)研究概要

建築ストック活用に関する研究は、設計・施工に加えて、運営面を含めて検討する必要がある。筆者が 6 年間にわたって地方における建築ストックの活用を支援してきた中で、属人的に知見を広めることに限界を感じた。そこで、本研究では、建築ストック活用の議論が活性化してきた過去 10 年間において災害レジリエンスにより発現した little-c の中心的な存在となった東日本大震災の被災地、コロナ禍のゲストハウスを対象に分析することで、建築ストックに関する「企画・設計・施工」と「持続可能な運営」のトランザクションをパターン・ランゲージの手法を用いて整理し、明らかにすることを目的とする。

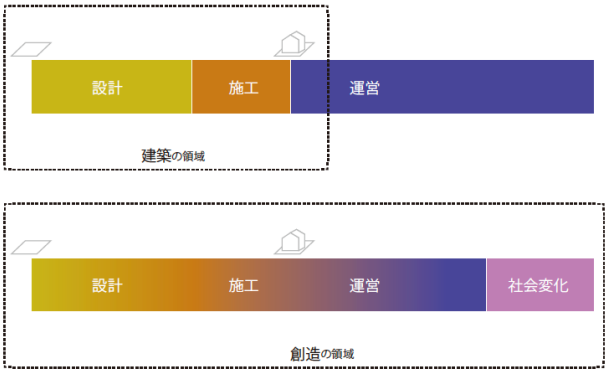
2. 研究成果の背景

本項では、著者が「2021 年度森泰吉郎記念研究振興基金研究者育成費（博士）の支援を受けて行った研究事業」（以下、「本研究事業」とする。）を行うにあたり前提となる設計施工と運営について述べる。

本研究事業を進めるにあたり、申請時には理解できていなかった、「設計」「施工」「運営」は切り離されるものではなく、「社会変化」まで含めたグラデーションを持って研究対象にする必要があることが分かってきた（図 1）。なお、ここでいう「社会変化」とは、出生率の向上、移住数の増加など個別の実践や政策では手の届かない成果を指す。

また、「ある土地に社会的意義のある建築物が建つ」という時間経過の中に建築並びに創造をテーマとした際に扱う領域の差異があることが実践を通して見えてきた。

図 1：建築ストック活用における建築と創造の領域



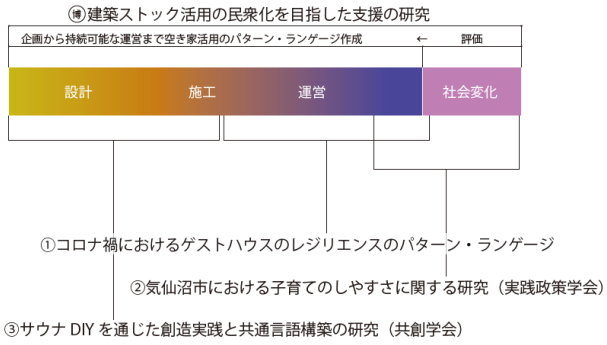
3. 2021 年度の研究活動内容

本研究事業では、主題「建築ストック活用の民衆化（申請時：大衆化）を目指した支援」に迫るべく、3 の研究テーマに大別して取り組んだ。ここでは、前項の「社会変化」をパターン・ランゲージという手法を用いた支援によって生まれた結果であると位置付け仮説構築を行なっている。

3.1 テーマ設定

上記の仮説を検証するため、昨今の社会情勢を鑑み、1 つ目のテーマは「①コロナ禍におけるゲストハウスのレジリエンスのパターン・ランゲージ」、社会変化を評価軸として捉えることを目的として「②気仙沼市における子育てのしやすさに関する研究」、設計・施工において起こっている事象を検討することを目的として「③サウナ DIY を通じた創造実践と共通言語構築の研究」とした（図 2）。

図 2：主題と研究テーマの関係



3.2　進行スケジュール

本研究事業の進行にあたっては、可能な限りのオンライン環境の活用、感染状況の変化に合わせたマイニング調査日の調整、関係者全員のフィールド内外での定期的なPCR・抗原検査、検温など新型コロナウイルス感染症の感染防止対策に最大の配慮を行った上で行われた。その結果、2022 年 2 月 27 日現在、以下の通り計 297 日・156 名の関わる本研究事業内において陽性者・濃厚接触者は確認されていない。

表 1 の通り、本研究事業は滞りなく進めることができた。なお、①②③は前項のテーマ設定と対応している。

表 1：研究活動内容一覧

期間	内容	対象者	場所
6/ 2- 3/31	③創造実践	37 名	気仙沼
8/14- 1/14	①実地調査	9 名	全国 8 箇所
10/27,11/23	②イベント開催	106 名	気仙沼
9/ 1- 3/31	①PL 作成	4 名	Online

4.　研究成果

①コロナ禍におけるゲストハウスのレジリエンスのパターン・ランゲージ

コロナ禍で優れたレジリエンスを発揮している全国の 8 ヶ所のゲストハウスにマイニング・ダイアローグを行った（表 2）。事業規模や活動内容も様々となっており、様々な実践の経験則を明らかにすることができた。

現在は、この経験則を体系化している最中であり、完成し次第、感染状況を鑑みて Web 一般公開を行う予定である。その後、フルディスクリプションのダウンロード時に集めたゲストハウス運営者に利用した上での効果をヒアリングし、都市計画学会へのジャーナル投稿を行う計画となっている。

表 2：マイニング・ダイアローグ実施記録

No.	実施日	参加メンバー	実施場所	実施時間	文字数
1	2021/8/14	田中惇敏、岡西未来、加納健太郎	オンライン	1 時間 29 分 17 秒	30,746 字
2	2021/10/27	田中惇敏、岡西未来	オンライン	44 分 32 秒	14,421 字
3	2021/11/12	田中惇敏、川邊悠紀、岡西未来	オンライン	1 時間 8 分 37 秒	25,761 字
4	2021/11/18	山中陽、田中惇敏、岡西未来	オンライン	1 時間 44 分 9 秒	35,929 字
5	2021/12/5	小川隆行、田中惇敏、岡西未来、田中彩夏	Ogaga ゲストハウス	53 分 51 秒	16,129 字
6	2021/12/6	半田守、小曽根雅彰、鈴木あすみ、田中惇敏、岡西未来、木原葵、田中彩夏	ゲストハウス元湯	2 時間 31 分 56 秒	55,442 字
7	2021/12/7	犬養拓、田中惇敏、岡西未来、木原葵、田中彩夏	有鄰庵	1 時間 56 分 00 秒	23,253 字
8	2021/12/7	犬養拓、田中惇敏、岡西未来、木原葵、田中彩夏	プリコール	1 時間 18 分 59 秒	25,083 字
9	2021/12/13	細田朋弘、田中惇敏、岡西未来、田中彩夏	Wise owl hostel Kyoto	51 分 29 秒	16,290 字
10	2022/1/14	柚木理雄、田中惇敏、岡西未来、田中彩夏	Little japan	53 分 57 秒	16,402 字

②気仙沼市における子育てのしやすさに関する研究

気仙沼市では、比較的規模が大きく、多様性に富んだ官民連携の子育て環境改善プロジェクトが進んでおり、出生率向上や子育て世代の移住者が集まってきている。

本テーマは、気仙沼市と著者が代表を務める「けせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム“コソダテノミカタ”」の共同で行った「けせんぬま子育てタウンミーティング」（写真 1）であがった市民の声と経済学的な統計結果から、地方における「こそだてのしやすさ」の一般化を目指した研究である。（研究内容の詳細は、3 月末に実践制作学会にジャーナル投稿予定となるため控えさせていただく。）

前項で示した「社会変化」が明らかになれば、気仙沼市の空き家活用の事例であり、著者が設計施工運営に携わっている実践にあたる「子育てシェアスペース Omusubi」の関係を整理することで主題全体を語ることのできる事例となると考えている。

vol.4（2021.11.23）の参加者：大人 38 名、子ども 20 名

vol.3（2021.10.27）の参加者：大人 35 名、子ども 13 名

③サウナ DIY を通じた創造実践と共通言語構築の研究

総務省主催「ふるさとワーキングホリデー」（以下、「ふるさとワーホリ」）事業の一環で宮城県気仙沼市に来訪した参加者は、地域での就労体験としてサウナ DIY に取り組でいる。彼らによるサウナ DIY という共創行為は、どのように「ふるさと」を形成しているのだろうかという視点から、本研究では、ふるさとワーホリ参加者及び、プロジェクト担当者、地域住民などのサウナの DIY という共創行為に関与している参加者らの内的世界を描写し、それらの経験がどのように再解釈されているのか理解する。なお、宮城県気仙沼市のふるさとワーホリ運営主体は、著者が代表を務める認定 NPO 法人 Cloud JAPAN が実施団体となって参加者の受け入れやプログラムのコーディネートを行っているため、研究範囲は現場での実践に加えて、活動後のアンケート内容や個別ヒアリングも含む。

今回の研究対象となるサウナの特徴は設計施工の経験のないふるさとワーホリ参加者らが「就労」の一環として貸

し出された工具を用いてサウナ建設に参画している点である。2 月 28 日まで 9 ターム行われたふるさとワーホリ期間中に 37 名の参加者が関わった（写真 1）。２つ目の特徴として、あえて設計図を描かいて、その完成イメージに合わせてつくっていくというアプローチではなく、当日の参加者によって、つくる行為や作品そのものに内在しているイメージに寄り添って育てていくアプローチをとったことである。

３つ目の特徴として、作成過程を随時 SNS 等で発信すること（写真 2）により、過去に関わった参加者の行動変容（再訪や関係施設への訪問）の変化を経過観察していることである。（研究内容の詳細は、共創学会にジャーナル投稿予定となるため控えさせていただく。）

本テーマは、前々項の「設計」「施工」時における創造性の発現とその効果を語る上で重要である。建築面積 10 ㎡以下であるため建築確認申請が必要なく、かつ、個人作業ではなし得ない行程が多々あることで、豊かな共創的な取り組みが生まれている。

5. 今後の展望

今回の本研究事業で各領域の重要な要素が明らかになった。この論点を採用し、企画から持続可能な運営までの空き家活用における研究を進めていく。具体的には、全国の豊かな建築ストック活用事例を調査し、「企画から持続可能な運営までの空き家活用のパターン・ランゲージ」の作成を行う。

また、著者の「東北へのボランティア派遣団体 Project 架け橋→ボランティアの宿としてのゲストハウス架け橋→観光客の宿としてのゲストハウス架け橋→全国への広まり→レジリエンスの発現 →新たなゲストハウスのあり方が生まれる」という実践からも仮説構築を行いたい。

その後、完成したパターンを活用し、全国で新たに空き家活用を行う中で有用性を示し、博士論文としてまとめる。

5. 謝辞

本研究事業を進めるにあたり必要となるインタビュー調査やパターン・ランゲージ制作の遂行、図面作成のための機材や、資料探索のための文献の調達に充当させていただきました。森泰吉郎様とその御功績はじめ、基金運営事務局の皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

研究過程においては、快く本研究事業を受け入れてくださった調査対象者の皆様、共に研究を進めてくださった慶應義塾大学井庭崇研究会の塾生、認定 NPO 法人 Cloud JAPAN 調査チームのスタッフ、けせんぬま子育てコレクティブインパクトプラットフォーム“コソダテノミカタ”調査チームのスタッフ、気仙沼市役所のご担当者の皆様に合わせて感謝申し上げます。

写真 2：サウナ DIY の行程の情報発信の様子

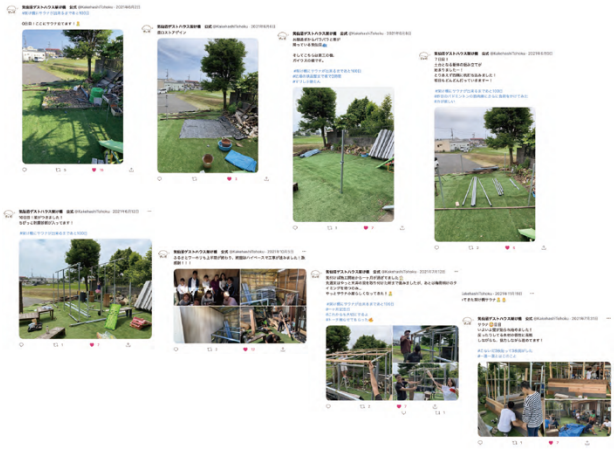


写真 1：2 月 18 日現在のサウナの様子